

宮崎県教育研修センター

確かな学力を育む学習指導の在り方 ～活用する力を育む算数・数学科の授業づくりを通して～

	研 究 員 共 同 研 究
研究主題	15 - 1
主題設定の理由	15 - 1
研究目標	15 - 1
研究仮説	15 - 1
研究構想	15 - 2
研究の実際	15 - 2
1 研究の基本的な考え方	15 - 2
2 活用する力を育むための手立て	15 - 3
(1) 単元計画の工夫	15 - 3
(2) 活用する力を育む問題の工夫	15 - 3
(3) 算数・数学的活動の充実	15 - 4
(4) 学習評価の工夫	15 - 4
(5) 授業モデルの構築	15 - 5
(6) 検証授業 の実際	15 - 6
(7) 検証授業 の実際	15 - 8
成果と課題	15 - 10
参考文献	15 - 10
研究同人	15 - 10

分かりやすさと学習意欲を大切にする国語科学習指導の在り方 ～特別支援教育の視点を生かした授業づくりを通して～

研 究 員 海 老 原 学
研究実践校 延岡市立南小学校

研究主題	15 - 11
主題設定の理由	15 - 11
研究目標	15 - 11
研究仮説	15 - 11
研究構想	15 - 12
研究の実際	15 - 12
1 研究の基本的な考え方	15 - 12
2 検証授業 の実際	15 - 16
3 検証授業 の実際	15 - 17
4 検証授業の考察	15 - 19
成果と課題	15 - 20
参考文献	15 - 20

研究主題

確かな学力を育む学習指導の在り方 ～活用する力を育む算数・数学科の授業づくりを通して～

主題設定の理由

児童生徒が自己実現を図り、生涯にわたって学び続けていくためには、確かな学力の育成が不可欠である。「知識基盤社会」といわれる現代社会においては、知識・技能を習得するだけでなく、その知識・技能を生かして日常生活に役立つ思考力・判断力・表現力等を育成することが重要である。改正された学校教育法において学力の3つの要素が示されたことにより、学校教育において「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」を養うことが周知され、学校ではその指導の工夫・改善が求められている。

また、第二次宮崎県教育振興基本計画においても、施策の目標として「生きる基盤を育む教育の推進」が示され、確かな学力を育む教育を推進することが明確に述べられている。それは、本県学校教育の現状を振り返ったとき、確かな学力を育むために、身に付けた知識・技能を基に、自ら考え、判断し、表現しながら課題を解決する力、つまり、活用する力を高める指導の充実が課題となっているからである。

このことを踏まえて、研究員在籍校における学習指導の状況を振り返ると、次のような課題が浮かび上がってきた。

「知識・技能を事前に習得させないと、活用させることはできない」という教師の思いが強く、習得の指導を重視する傾向がある。

活用を重視した授業実践が少なく、どのようにすれば児童生徒に活用する力がつく授業になるのかを模索している段階である。

上記の課題を解決するために、教科指導の中で習得した知識・技能を活用する場面を設定したり、活用することのよさを実感させたりすることが大事であると考え。このような教科指導の研究によって児童生徒が学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それを活用して課題解決のための思考力・判断力・表現力等が高まることになれば、それは学習指導要領の基本理念である「生きる力」の1つである、確かな学力を育むことにもつながると考える。

また、活用する力を育むためには、児童生徒同士が学び合い磨き合う力を高めることが授業づくりの基盤にあると考える。

活用する力を育む授業づくりについての理論を構築し、実践的な研究を通して明らかになる成果と課題を各学校に広めていくことは、「未来を切り拓く心豊かでたくましい宮崎の人づくり」の具現化に向けた本県の教育課題の解決に寄与できると考え、本主題を設定した。

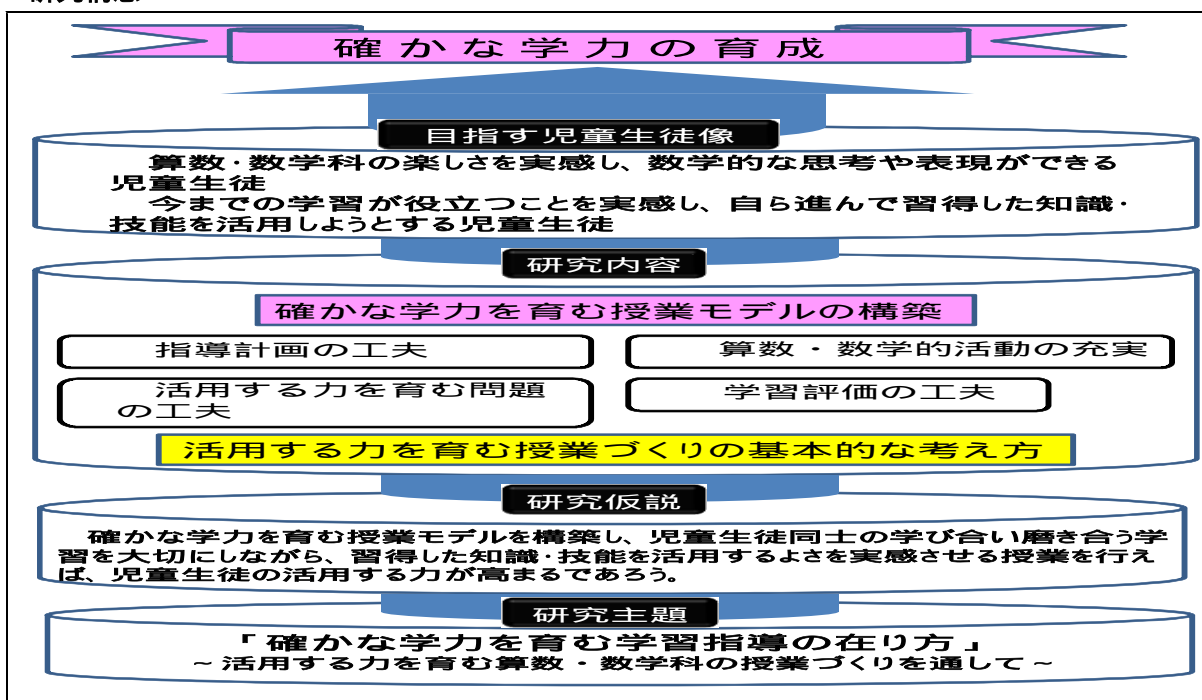
研究目標

算数・数学科における活用する力を育むために、理論や授業モデルを構築することによって、確かな学力を育む学習指導の在り方を究明する。

研究仮説

確かな学力を育む授業モデルを構築し、児童生徒同士の学び合い磨き合う学習を大切にしながら、習得した知識・技能を活用するよさを実感させる授業を行えば、児童生徒の活用する力が高まるであろう。

研究構想



研究の実際

1 活用する力を育む授業づくりの基本的な考え方

算数・数学科の学習で身に付けた知識・技能や数学的な考え方が、日常生活やより発展した学習の場面で役立つことが活用のよさである。算数・数学科の指導内容は系統性が明確であるので、児童生徒が主体的に学び、既習事項を活用しながら新しく知識・技能を習得したり、数学的な考え方を身に付けたりすることを教科指導で大切にしたいと考えた。

そこで、本研究では副題にある「活用する力」を、能力面と意欲面の2つの視点でとらえ、次のように定義した。

問題解決のために、習得した知識・技能を活用できる力	『思考力』『判断力』『表現力』
問題解決のために、習得した知識・技能を活用しようとする力	『学習力』

この活用する力を育むためには、個としての学びだけでなく、他者との学びの場が必要であり、児童生徒同士が学び合い磨き合う力を高める視点も大事であると考えた。そこで、この力を『関係力』として、定義することにした。

以上を踏まえ、本研究では活用する力を育む授業づくりを通して、これらの5つの力を身に付けさせたいと考えた。それぞれの力については、具体的には次のように整理した。

思考力：言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて数学的に考えることができる力
判断力：どんな既習事項が使えるのか、自分や友達の思考過程や導いた答えが正しいのかを判断できる力
表現力：思考、判断したことを言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて書いたり、話したりして説明できる力
学習力：算数・数学科の楽しさや活用のよさを実感し、進んで学習に取り組んだり、生活に生かそうとしたりする心情や態度
関係力：友達との話合いを基に友達の考えのよさを取り入れたり、考えの違いを指摘し合ったりして、よりよい解決方法を見つけ出そうとする心情や態度

「学習力」「関係力」については、研究員で設定した用語である。

2 活用する力を育むための手立て

(1) 指導計画の工夫

ア 単元計画案の作成

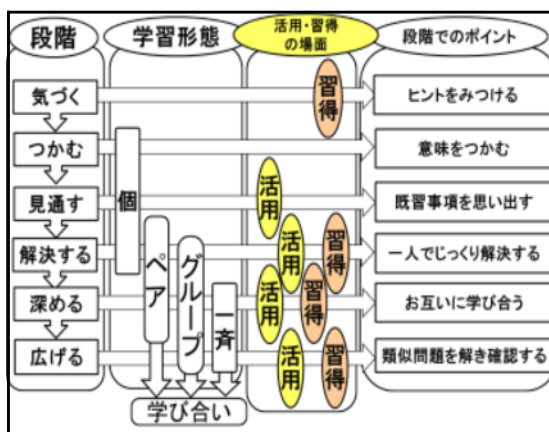
単元計画案を単元と内容の系統を考慮し、作成することで、1単位時間ごとに活用と習得のそれぞれを重視する時間や活用と習得のバランスを重視する時間を計画的に位置付けていくことができると考える。さらに、指導内容を精選して、活用を重視した時間を計画的に位置付けることで、児童生徒に活用する力を育むことができると考える。また、この単元計画案を基に、勤務校の担当職員で共通理解を図り、活用する力を育むための授業を共通実践できると考えた。(資料)

『活』：活用を重視、『習』：習得を重視、『パ』：活用と習得のバランス		
時数	授業計画	指導上の留意点
1	学習活動の記入	指導上の留意点の記入
	『活』・『習』・『パ』の記入 例：学習したことを日常生活に生かそうとする態度を育てる。	
10	『活』 和と差の計算方法を見つける。	学び合い活動をさせる。
11	『パ』 根号をふくむ積の計算をする。	ノートの中をできるだけ簡単にするように注意する。
12	『パ』 乗法公式を利用して問題を解く。	公式の定着を徹底する。
13	『活』 自分で解いた問題をペアで相互採点し、教え合う。(演習問題1)	相互採点をさせる。

【資料】：単元計画案】

イ 1単位時間の学習指導過程の構成

学習指導過程を6つの段階(資料)に分けることで、各段階のねらいを明確にし、教師が活用と習得の場面を意識して授業を行うことができると考える。また、学習形態を意図的に工夫することで、児童生徒は、数学的な考え方をもち、思考が広がっていくと考える。そこで、自分の考えを判断したり、表現したりすることで、学び合う活動につながり、5つの力を高めていくことができると考える。



【資料】：1単位時間の6つの段階】

(2) 活用する力を育む問題の工夫

活用する力を育むためには、習得した知識・技能を活用する問題を指導計画の中に位置付けて、授業を展開することが必要であると考え。そして、活用する力を育む問題を次のように作成した。

ア 活用する力を育む問題の基本的な考え方

活用する力を育む問題とは、習得した知識・技能を活用して、思考力、判断力、表現力等を育むことを目的とした問題であり、必要な情報を取り出したり、根拠をもって考えたり、自分の考えを説明したりする等の言語活動に取り組めるような内容と考える。

イ 活用する力を育む問題の作成

問題の作成に当たっては、学習指導要領や全国学力・学習状況調査B問題作成の4観点を基に、教科書の問題を活用したり、日常生活に関連した問題を新たに作成したりしていくことが重要であると考え。

(ア) 教科書の問題の活用

教科書の問題を児童生徒の活用する力を育む視点から見直し、授業を展開していくことが最も重要であると考えた。検証授業では、図形を用いて平方根の和を求める問題の工夫を行うこととした。

(イ) 日常生活に関連した問題の作成及び活用

日常生活に関連した問題を新たに作成し、単元指導計画の中に位置付けていくことも活用する力を育む上で重要であると考え。そうすることで、児童生徒の学習力を高めるとともに、活用することのよさを実感させることができると考える。そこで、日常生活に関連した問題を作成するとともに出題の趣旨や各設問の趣旨、正答と解説、授業例、解答類型と児童生徒の反応を作成し、検証授業を行うこととした。

(3) 算数・数学的活動の充実

活用する力を育むためには、児童生徒が学習課題を解決する中で、問題の解き方を考えたり、友達と学び合ったりする活動等の算数・数学的活動を充実させることが大切であるとする。本研究では算数・数学的活動について次のようにとらえることとする。

算数・数学的活動は、大きく2種類に分けられる。

【外的な活動】…具体物や身体等を用いた作業的・体験的な活動

【内的な活動】…発展的・応用的に考えたりする活動や表現したり、説明したりする活動

活用する力を育む授業づくりにおいて一番重要なことは、次のとおりである。

言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて考えたり、説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりするなどの学習活動を積極的に取り入れること。

なお、算数・数学的活動を充実させるポイントには、次のようなことがあると考える。

児童生徒が学習することへの必要感に迫られたり、知的好奇心を揺さぶられたりして、習得した知識・技能を活用したいと思う場面を、教師が指導過程に組み込むこと。

外的な活動を大事にしながらも、主に内的な活動の充実を図ること。

思考、判断と表現は表裏一体なので、授業では思考、判断したものを可視化し、それを基に表現させる場を大切に扱うこと。

自分の考えをもたせた上で、みんなで考える学習活動を大切にすること。

(4) 学習評価の工夫

活用する力を育むためには、児童生徒に活用する力が育まれているかを見取り、それに応じた支援を行うために、適切な学習評価が必要になる。そのためには、教師が児童生徒に「この単元で、どのような活用する力を身に付けさせるのか」という具体的な力を明確にし、毎時間の評価項目や方法を設定する必要があると考える。

本研究では、算数・数学的活動を充実させるポイントを踏まえ、自分の考えを可視化し、学び合う学習活動に取り組みさせるために、「書く」「説明する」活動を重視した。

検証授業では、生徒の学習状況に応じて指導と評価の一体化を行うとともに、自己評価カードを活用して生徒の個々の学習状況を見取り、個に応じた支援を行うことにした。

検証授業では、検証授業で行った評価を引き継ぐとともに、パフォーマンス評価を行うことにした。パフォーマンス評価とは、一定の課題の中で身に付けた力を用いて活動することを通して、その力を評価する方法のことである。

具体的には、授業で用いた児童のワークシートに、教師のコメントを入れて、児童に返却するようにした。教師のコメントを見た児童は、自分のがんばりを認められたことに対し喜びを感じ、やる気を出すことが多いと考える。そこで、児童の解き方を、ルーブリック(資料)を基に評価するとともに、児童の解き方や着眼点のよさを認め称賛するなど励ましのコメントを入れ、児童に返却した。

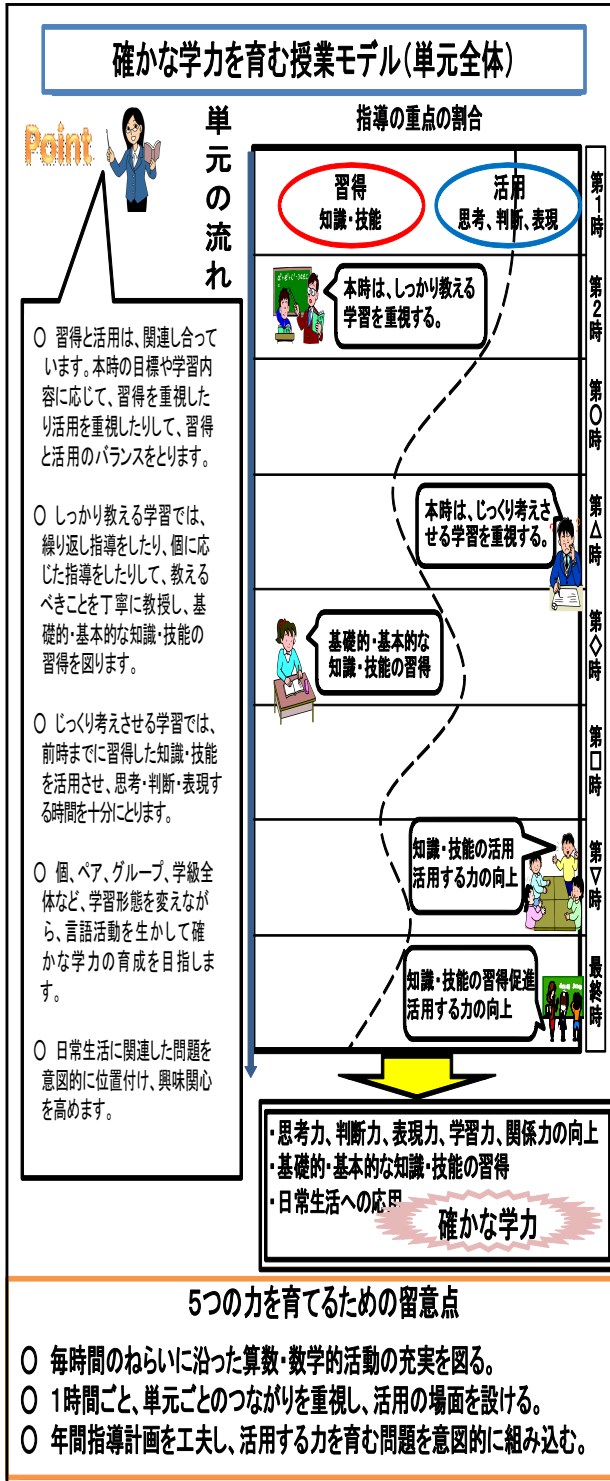
本時の評価規準・・・「速さについての身近な問題に対して、習得した知識・技能を活用して答えの求め方を考え、それを言葉や数、式、線分図などを用いて説明することができる。」			
	思考力・判断力・表現力(活用)	技能・知識・理解(習得)	学習力・関係力
観点 の 説明	習得した知識・技能を生かした活用する力 問題の解き方を考え、それを相手に伝えるために説明する	公式を使った計算力 適切な公式の適用 速さの意味理解 時速・分速・秒速などの単位換算	授業に対する興味・関心・態度 学び合いの段階での友だちとの関わり
A 評価	・ 自分の考えを言葉や数、式、線分図などを複数組み合わせで説明し、正しい答えを求めることができる。 ・ 1つの解き方だけでなく、他の解き方も考えて、それを説明することができる。 ・ できるだけシンプルに考えることができる。	・ 公式を使って早く正確に計算できる。 ・ 速さの意味や時速・分速の違いなどを正しく理解している。 ・ できるだけシンプルに計算している。	・ 学習に意欲的に取り組み、友だちと積極的に関わりをもとらしている。
B 評価	・ 自分の考えを言葉や数、式、線分図などを用いて説明し、正	・ 公式を使って計算できる。 ・ 速さの意味や時速・分速	・ 学習に取り組み、友だちと関わりをも

【資料】：使用したルーブリック】

(5) 授業モデルの構築

このように研究してきた4つの視点を1つにまとめ、単元全体および1単位時間の授業モデルを構築した。(資料④)(資料⑤)

この授業モデルを基に研究員全員で検証授業の教材研究や事前研究を行うことで、授業における成果や課題を共有し、児童生徒に活用するよさを実感させることのできる授業づくりにつながると考える。そして、児童生徒の実態や指導する単元・内容に応じて、このような授業モデルを基にした授業を継続して展開していくことにより、児童生徒に5つの力を身に付けさせることができると考える。



5つの力を育てるための留意点

- 毎時間のねらいに沿った算数・数学的活動の充実を図る。
- 1時間ごと、単元ごとのつながりを重視し、活用の場面を設ける。
- 年間指導計画を工夫し、活用する力を育む問題を意図的に組み込む。

【資料④】：単元全体の授業モデル

活用する力を育む授業モデル(1単位時間)

段階	学習内容及び学習活動	児童生徒の意識の流れ(活用意識)	指導上の留意点(各視点ごと)
気づく 5分	1. 前時の復習をする。 ○ 小テスト ○ フラッシュカード	・ 前の時間に習ったことを思い出したぞ。 	★「活用する力を育む問題」から ※ 習得した知識・技能を活用すれば解けるような、少し難しい問題にしたり、日常生活との関わりが深い問題にしたりすることで、学習意欲を高めたり、活用の場面を増やしたりする。
つかむ 5分	2. 学習問題を把握する。 ○ 問題文を読む。 ○ 問題の意味をつかむ。 ○ 本時のめあてを確認する。	・ 今日はこの問題を解くんだ。 	※ 問題によって選択式、短答式、記述式など出題形式を工夫することで、いろいろな答え方ができるようにする。
見通す 3分	3. 解き方を予想する。 ○ 自分の言葉で発表する。	・ 前に習ったことを使えば解けそうぞ。 	★「算数・数学的活動」から ※ 言葉や数、式、図、表、グラフなどを適切に用いて自分の考えをまとめ、相手に分かってもらうように説明させる。
解決する 12分	4. 問題を解決する。 ○ 自力解決をする。	・ うまくいきそうぞ。 ・ 何かおかしな。 ・ 答えが出たから、解き方をみんなに伝えたい。 ・ 分からないから、友達に教えてほしい。 	※ 自力解決の時間を十分に確保し、自分の考えを書かせたり、ペア学習で必ず自分の考えを説明したりする言語活動を取り入れる。 ※ 数学的な思考、表現を重視する。
深める 15分	5. 学び合い学習をする。 ○ ペアで話し合う。 ○ 集団解決をする。	・ 自分の解き方は合っていたぞ。 ・ いろいろな解き方があるんだ。 ・ ○○さんの解き方が一番分かりやすい。 ・ これからは、この解き方を使っていこう。 	★「学習評価の工夫」から ※ 毎時間の自己評価や授業観察などをともに子ども1人1人の実態を把握し、次時の指導に生かす。 ※ 子どもの言葉をよく見取り、アドバイスや個に応じた支援、称賛などを意図的に行う。
広げる 5分 中学 10分	6. 本時のまとめをする。 ○ 自分の言葉で本時の学びを書きまとめる。 ○ 別の方法で確かめたり、類似問題を解いたりする。	・ 今日の勉強で○○が分かったぞ ・ 今日学習したことを使えば、似たような問題も解けるぞ。 	※ 必要に応じてルーブリック評価を取り入れ、子ども1人1人の思考力、判断力、表現力や知識・技能について評価し、それを子どもにフィードバックすることで、学習意欲の向上をねらう。

5つの力を育てるための留意点

<p>思考力</p> <p>すべての段階で育てるものであるが、特に書いたり説明したりする活動を重視して指導する。</p>	<p>学習力</p> <p>教師からの温かい言葉かけ、問題の工夫、学び合いなどが重要である。</p>	<p>関係力</p> <p>学び合い学習で、友達との関わりを意図的に組み込む。</p>
---	---	--

【資料⑤】：1単位時間の授業モデル

(6) 検証授業 の実際 (三股町立三股中学校 第3学年)

ア 単元名 「平方根」 (全16時間:本時10時間目)

イ 本時の目標

根号を含む和と差の式の計算過程を、近似値や正方形の一边の長さや面積に着目し、正しい解き方を見付け、計算することができる。

ウ 本時の学習で身に付けさせたい5つの力

《思考力・判断力・表現力》について

平方根を含む式の加法について、既習事項を活用して、思考、判断しながら正しい計算法を見付け、友達に説明することができる。

《学習力・関係力》について

根号を含む式の和と差の正しい計算法を友達と協力して操作活動を行ったり、積極的に意見を出し合ったりしながら見付けることができる。

エ 研究内容の具体化

(ア) 指導計画の工夫について

活用を重視した授業にするために、既習事項を活用して課題解決ができるような計画を立て授業を行った。(資料)
また、1単位時間での活用と習得の場面を設定した。活用する場面では、既習事項を活用することで問題解決が図れるようにし、習得する場面では、類似問題を解くことで、授業内容の再確認ができるようにした。

(イ) 活用する力を育む問題の工夫について

教科書の問題を基に、(資料)同類項の計算の仕方を利用して解くことを導くために、正方形を利用することにした。具体的には、正方形を4枚集めて、大きな正方形を作り、その一边の長さを求めることで、平方根の和について考えさせた。

(ウ) 数学的活動の充実について

本時では、〔既習事項の内容を活用して思考したことを図や式を利用し、論述する〕〔論述したことをペア・グループに説明し、理解を得る〕〔自分の考え方をまとめ、説明しながら発表する〕数学的活動を取り入れ言語活動の充実を図った。

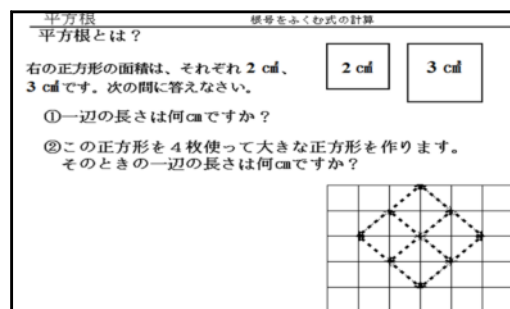
まず、見通す段階で自分の考えをもたせ、ワークシートにまとめさせた。その上で、解決する・深める段階でペア活動やグループ活動(資料)を取り入れ、お互いの考えを説明する学び合いを行った。

学習内容及び学習活動	備考と類型	機
1 復習をする。 ・フラッシュカードによる復習 $\sqrt{4}=2$ 、 $\sqrt{24}=2\sqrt{6}$ 等 	プリント フラッシュカード	個 ↓
2 問題を把握する。 この形は何でしょう? この正方形の面積は、 $3\text{cm} \times 3\text{cm}$ ですか? この正方形の一边の長さは何cmですか? この正方形を並べて大きな正方形を作ります。そのときの一边の長さは何cmですか? 黙って考えてみましょう!	正方形模型 面積模型	一斉 ↓
ex $\sqrt{2} + \sqrt{2} =$ $\sqrt{3} + \sqrt{3} =$ $\sqrt{2} + \sqrt{3} =$	数学的活動① (説明) 活用	ペア ↓
3 課題を把握する。 根号をふくむ式の和(足し算)の計算の仕方を考えよう! ・グループで、それぞれの考えを発表しよう。 ・全体発表の準備を行う。 ・代表者を決め、発表の準備に入る。 	正方形模型 数学的活動② (伝え合い) 自己採点 マジック	個 ↓ ペア・グループ
4 発表する。 発表の準備が終わるまで、違う考えをしている人の説明を聞いて、ワークシートにまとめてみよう! 同じ考え方をしている人同士で再度確認して見てください。 自信をもって発表しよう! 	指示棒 正方形模型 数学的活動③ (発表)	一斉 ↓
5 確認する。 確認していきます。 差についても説明していきます。 練習問題をします。 6 まとめをする。 ・平方根の長さを覚えるために、例題を表示し、課題につなげていくようにする。 7 自己評価をする。 平方根は身近にあるものなんです。	数学的活動④ (要約) プリント 習得 問題集 面積分割 模型 自己評価 プリント	個 ↓ 一斉

【資料 : 学習指導過程】

(I) 学習評価の工夫について

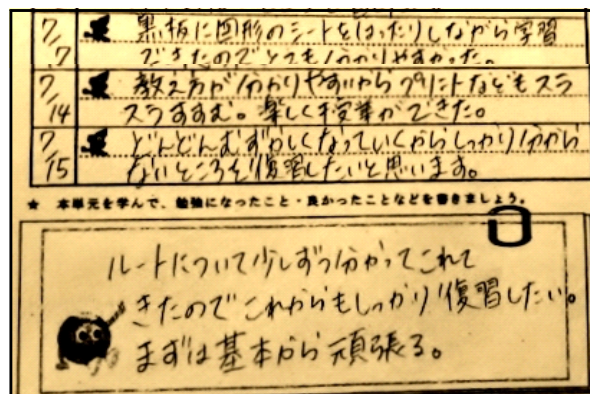
単元を通して、生徒の活用する力や理解度を把握するために自己評価カード（資料）を活用した。前時の自己評価から、本時に支援が必要と思われる生徒に対しては、生徒の努力（工夫）しているところを認めたり、称賛したりなどの個に応じた支援を行った。



【資料】作成した学習問題】



【資料】グループ活動の様子】



【資料】自己評価カード】

オ 考察

指導計画の工夫では、学習指導過程の6つの段階で活用と習得の場を意図的に設定することにより、授業のねらいが明確になった。そして、授業モデルを基に授業を行い、既習事項を活用し問題解決を図る手立てを講じたことで、生徒が解決する段階で「あれ（一次方程式の和の計算）と一緒にだよ」という発言があった。このことから、活用するよさを感じさせることができたと考える。単元計画案を利用することで、活用と習得の時間を明確にし、授業に取り組むことができ、勤務校の担当職員で、話し合いながら計画を立て、共通実践を行うことができたと考える。

活用する力を育む視点から教科書の問題を設定したことで、生徒に、平方根の和を図形から視覚的にとらえさせ、計算方法を考えさせることができた。活用する力を育む問題を観点に沿って作成することが、活用を重視した授業に効果があると考えられる。

自分の考えを図や式を活用してペアやグループで説明したり、確認し合ったりする数学的活動を取り入れたことで、「友達の意見を聞いたり、自分の考えを説明したりすることで、分からなかったことが理解できたり、気が付かなかったことを教えてもらったりと様々な考え方に触れることができた」「友達と活動をするとうまく理解できる」という意見があり、自分の考えを表現しようとする気持ちが高まり、友達とのかかわりを深めることができ、学習力を高めることができたと考える。

自己評価カードを毎時間使うことで、生徒は、授業の取組に対する反省や、理解できた事柄について簡潔に書くことができ、次の時間に向けて取り組むことや復習する内容が分かり、学習力を高めることにつながったと考える。

数学的な考え方や活用する力には個人差があることから、個の学習状況に対応した数学的活動について解き方や学び合う活動の視点からの研究をさらに深め、数学的活動における各活動の有効性やねらいを明確にしていく必要があると考える。

(7) 検証授業 の実際 (延岡市立南小学校 第6学年)

ア 単元名 「速さ」 (全9時間:本時9時間目)

イ 本時の目標

身近な話題を基にした活用する力を育む問題に対して、今までに習得した速さに関する知識・技能を生かし、言葉や数、式、線分図などを使って自分の考えを論述したり説明したりすることができる。

ウ 本時で身に付けさせたい5つの力

《思考力・判断力・表現力》について

今までの学習で習得した知識・技能を活用して、答えを求めるための考え方を言葉や数、式、線分図など自分なりの方法で論述・説明したり、学級全体で伝え合ったり、学びを振り返って自分の言葉で記録したりする。

《学習力・関係力》について

問題に対して意欲的に取り組んだり、自分だけでなく友達の考えも参考にしながら協力したりして答えを出そうとする。






エ 研究内容の具体化

(ア) 指導計画の工夫について

通常、単元の最後に行う復習問題を繰り上げて毎時間の気付く段階や広げる段階で行わせた。これにより、単元の最後に特設の時間(資料)を捻出し、活用する力を育む問題にじっくり取り組むことができるような単元計画を立てた。単元の導入段階で、自分の走る速さと1000m走の世界記録を比べる問題を位置付けたり、第6時では、身近なところに使われている速さを写真で紹介したりした。そうすることで単元全体を通して、速さを学ぶ意義や有用性を感じさせ、主体的に学習に取り組めるように指導計画の工夫を行った。

(イ) 活用する力を育む問題の工夫について

活用する力を育む授業やその学習評価を意図的・計画的に実施するために、学校近くにある高速道路を取り上げ、児童が思考、判断したことを様々な方法で表現できるような問題を作成し、本時で活用した。問題を作成するとともに、授業例(資料)を考えたり、予想される解き方を整理したり、授業後に児童の解答を分析したりして授業改善に役立てた。

場面	学習内容及び学習活動	予想される児童の意識と反応
5分 気づく	1 前時までの復習をする。 速さの公式や速さの意味などについて小テストを行うことで、知識・技能の習得を図る。	○ 簡単にできそうだな。 ○ どうするんだっただかな。 
5分 つかむ	2 問題文を読み、題意を把握する。 前時までに習得した知識・技能を活用でき、主体的に学ぶ意欲をもたせるために、身近なものを生かした学習問題を作成した。この問題で算数を学ぶ意義や有用性を感じさせる。	○ この通知ってるよ。 ○ 解いてみたい。 
3分 見通す	3 問題文の解き方を考える。 問題を解くために習得している知識・技能や数学的な考え方を想起させ、見通しをもたせて解き方を予想させる。	○ 線分図を使って考えてみよう。 ○ 時間や道のりを求める公式を使えばできそうだな。 
12分 解決する	4 自力解決をする。 習得した知識・技能を活用して、数学的な思考・表現を基に自分がやりやすい方法で書きまとめさせる。	
15分 深める	5 学び合いをする。 個→ペア→学級全体と学習形態を変えながら、数学的に思考したり表現したりする時間と機会を確保する。	○ 僕は、□□□のように考えました。だから答えは□□□です。 
5分 広げる	7 今日の学習の学びを整理して記録する。	

【資料 : 学習指導過程】

(ウ) 算数的活動の充実について

本時では、「答えを求めるための考え方を言葉や数、式、線分図など自分なりの方法で論述する」「論述したことをペアまたは学級全体に説明する」「本時の学習の学びを自分の言葉で記録する」の3つの算数的活動を取り入れるなど、言語活動の充実を図った。論述の場面(資料)では、児童のノートに数学的な思考や表現で問題の解き方を書きまとめさせた。説明する場面(資料)では、全員が表現する場を保障するため、ペア学習の中で一人45秒で、自分の考えを話させたり、相手の考えを解釈して伝えさせたりした。記録する場面では、授業の最後に学習の感想を書かせることで、活用するよさを実感させるようにした。

(エ) 学習評価の工夫について

パフォーマンス評価では、授業後に児童のワークシートを回収し、それに書いてある考え方を分析することで、児童一人一人の思考力・判断力・表現力や知識・技能の習得状況を把握した。(資料)その際、客観的に評価するためにループリックを作成し活用した。作成及び活用に当たっては、授業者一人で行うのではなく、研究員四人で協働して行うことで、評価の視点や基準が偏らない客観的な評価になるよう工夫した。

【資料】：授業例の一部】

【資料】：論述の一例】



【資料】：自分の考えを説明する活動】

【資料】：パフォーマンス評価の一例】

オ 考 察

指導計画の工夫では、活用と習得のバランスを考えたり、1単位時間ごとの学習内容を工夫したりして指導計画を立てたことで、学習したことと日常生活を関連させることができた。それにより、児童は学習力を高め、学ぶことの意義や有用性を感じることができたと考える。

既習事項を活用して解くことができる身近な問題を取り入れたことで、主体的に思考、判断したことを表現する学習が充実したと考える。

各自で問題の解き方を表現したり、友達と学び合ったりする時間を保障したことで、授業後の学習の感想に「いろいろなどところに行くときに何時間でつくかなどを自分で計算できるから、この勉強をしてよかった」「今までに習ったことをしっかり生かしながら、問題を解くことができた」等、活用するよさを実感した児童が多く見られた。

様々な表現方法で書かれた思考、判断の過程を読み取ることで、現時点での児童生徒の理解度や表現力等を把握できた。それをその後の指導に生かすことで自分の考えを書いたり説明したりする活動が次第に充実してきたと考える。

児童の実態に応じた日常生活に関連した問題の作成や、それを活用した授業実践、パフォーマンス評価などは児童の5つの力を高めるのに有効ではあるが、その取組については内容の見直しを含めて研究を深めていく必要がある。

成果と課題

単元全体及び1単位時間における授業モデルを構築し、それを基に教材研究や授業を行うことで、習得と活用のバランスのとれた指導が展開され、児童生徒の活用する力や関係力を高めることができた。

日常生活に関連した問題を設定することにより、児童生徒の学習力を高め、進んで思考、判断し、表現しようとする意欲を高めることができた。

自分の考えを言葉や数、式、図などを用いて数学的に思考、表現する算数・数学的活動を充実させたことで、児童生徒の活用する力や関係力を高めることができた。

自己評価やパフォーマンス評価を基に指導と評価の一体化を図ることで、児童生徒の学習力が高まり、活用する力を育むことができた。

活用する力を育む問題の工夫では、特に教科書の問題を用いた授業において、問題を工夫し、活用する力を育むための指導方法をさらに究明していく必要がある。

活用する力をさらに育み、算数・数学科の楽しさをより一層感じさせることができるような授業づくりの工夫・改善が必要である。

《引用・参考文献》

- | | | |
|--------------------------------|---------------------|------------|
| ・ 小学校学習指導要領解説 算数編 | 文部科学省 | 東洋館出版社 |
| ・ 中学校学習指導要領解説 数学編 | 文部科学省 | 東洋館出版社 |
| ・ 言語活動を充実させる指導と事例 | 文部科学省 | |
| ・ 児童生徒の学習評価の在り方について（報告） | 文部科学省 | |
| ・ 平成22年度全国学力・学習状況調査解説資料 | 国立教育政策研究所教育課程研究センター | |
| ・ 平成22年度全国学力・学習状況調査報告書 | 文部科学省・国立教育政策研究所 | |
| ・ 学習状況の評価に関する手引き | 宮崎県教育委員会 | |
| ・ 「活用型」学習の授業モデル | 大熊徹 | 明治図書 |
| ・ 活用力を育てる授業の考え方と実践 | 安彦忠彦 | 図書文化 |
| ・ パフォーマンス評価 | 松下佳代 | 日本標準ブックレット |
| ・ VIEW 2 1 小学版 2009vol.2、vol.4 | Benesse 教育研究開発センター | |

《研究同人》

- | | | | | |
|-------------|-----|-------|-------------|-----|
| 宮崎県教育研修センター | 研究員 | 松蘭 博史 | （宮崎市立佐土原小学校 | 教諭） |
| | | 永野 一美 | （宮崎市立宮崎中学校 | 教諭） |
| | | 大隈 岳至 | （三股町立三股中学校 | 教諭） |
| | | 海老原 学 | （延岡市立南小学校 | 教諭） |

研究主題

分かりやすさと学習意欲を大切にする国語科学習指導の在り方
～ 特別支援教育の視点を生かした授業づくりを通して～

主題設定の理由

- H14 全国実態調査 学習面か行動面に著しい困難をもっている児童生徒の割合
- H19 特別支援教育の実施
- H20～ 学習指導要領の改訂・実施
- H23 第二次宮崎県教育振興基本計画 共生社会を目指す特別支援教育の推進

6.3%

特別支援教育への関心の高まり

通常の学級において、障がいの有無に関わらず、すべての児童を包み込んだ指導の在り方が問われる時代になってきた。

本校児童の実態

他者との関わり方が苦手なEさん

通常の学級で十分に適応できる児童

話すこと・聞くこと
苦手なAさん

読むこと
苦手なBさん

書くこと
苦手なCさん

学習意欲、自己肯定感
低下のDさん

延岡市

課題

- 児童一人一人の教育的ニーズに応える学校の支援体制づくり

教育実践の重点事項

- 学力の向上と特別支援教育の充実

延岡市立南小学校

努力事項

- 分かる授業の工夫
- 基礎学力の定着・向上
- 個に応じた指導・支援の徹底
- 学習意欲の継続化を図る授業構築
- 校内研究
- UDを意識した算数科学習指導

国語科における特別支援教育の視点を生かした研究の推進

国語科を研究対象とする理由

理由1

言語能力の育成を図る
中心的な教科である

理由2

伝え合う力が目標に
掲げられている

理由3

国語科の3領域は他教科等
の指導とも密接な関係がある

研究主題・副題

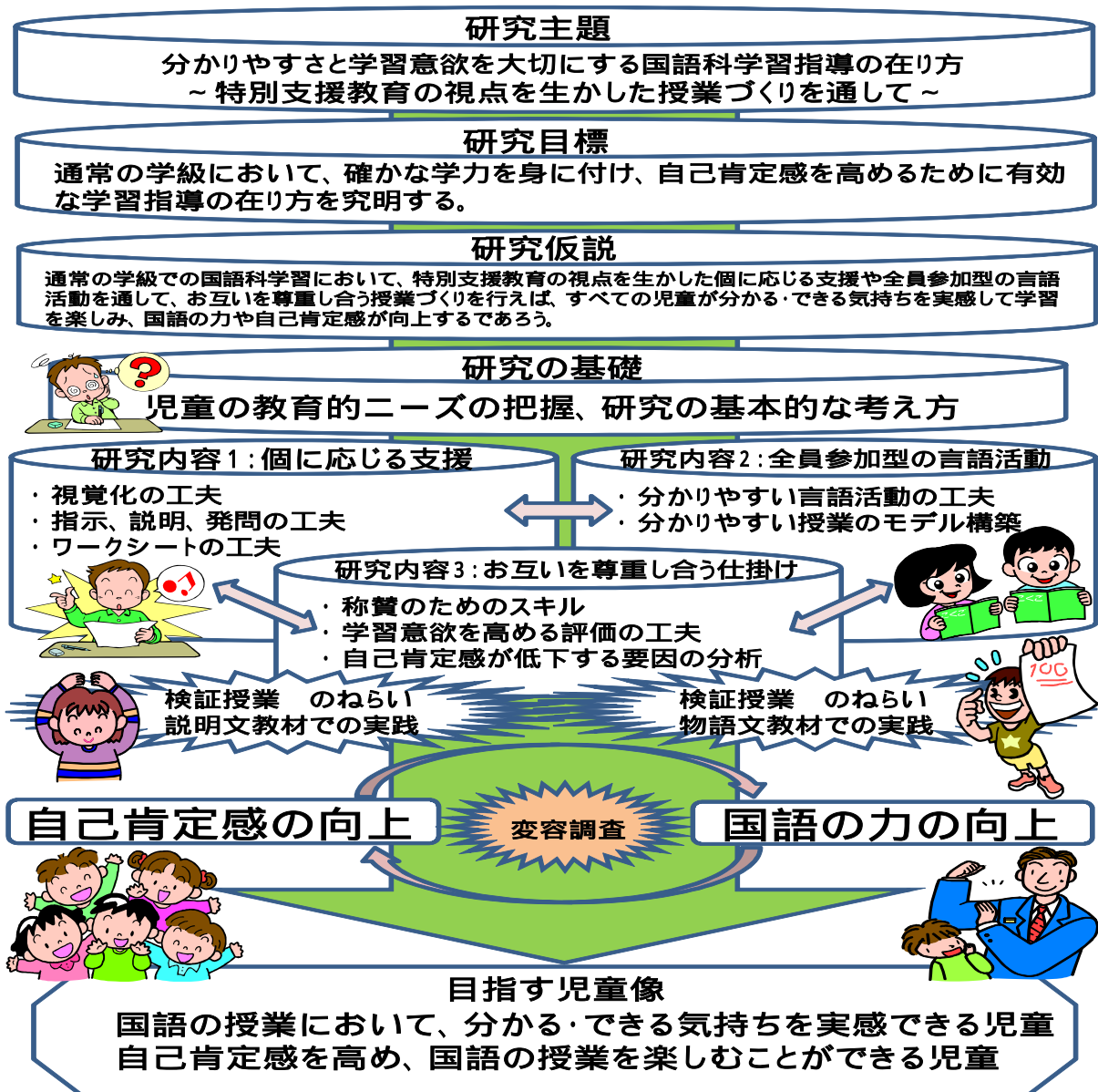
研究目標

通常の学級において、確かな学力を身に付け、自己肯定感を高めるために有効な学習指導の在り方を究明する。

研究仮説

通常の学級での国語科学習において、特別支援教育の視点を生かした個に応じる支援や全員参加型の言語活動を通して、お互いを尊重し合う授業づくりを行えば、すべての児童が分かる・できる気持ちを実感して学習を楽しみ、国語の力や自己肯定感が向上するであろう。

研究構想



研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 共生社会と学校教育

現在、国ではインクルーシブ教育システム構築に向けて、特別支援教育の方向性が議論されている。インクルーシブ教育とは、「包括的な」「包み込む」教育という理念であり、多様な個人が同じ場で共に学ぶことができる教育システムの構築が望まれている。また、県では第二次宮崎県教育振興基本計画（平成23年7月）において、「共生社会を目指す特別支援教育の推進」が施策の1つとして示された。共生社会とは、障がいの有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる社会のことである。

学校教育においては、特別支援学校や特別支援学級、通級による指導といった、場を分けた指導だけでなく、通常の学級において、障がいの有無に関わらず多様な個人が能力を発揮しつつ、お互いを正しく理解し、共に助け合いながら学習できるようになることが求められている。

本研究では、共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育の具現化には、通常の学級における学習指導の充実が必須であるととらえ、特別支援教育の視点を生かした通常の学級での授業研究を行うことにした。

(2) 通常の学級における特別支援教育の在り方

通常の学級において、教科指導力のある教師には資料に示すような特徴があると考えられる。これらは、特別支援教育で大切にしている内容と共通していることが分かる。そこで、本研究では従来の教科指導と特別支援教育の視点からの指導において共通する指導方法を中心に、一斉指導における授業改善を行うこととした。

通常の学級で行う特別支援教育とは決して授業のレベルや指導内容の難易度を下げることではない。すべての児童が教科の目標を達成できることを目指して行う「やさしい教育」が本研究の中核である。「やさしい教育」とは、以下のように2つの意味で定義した。

「優しい教育」：児童への思いやりがあり、一人一人にきめ細かく配慮する教育。
 「易しい教育」：分かりやすい指導で、児童が学習内容を理解・習得しやすい教育。

優しい教育によって自己肯定感が高まり、易しい教育によって国語の力が高まるととらえた。本研究の手法を取り入れても十分な対応が難しい時には、特別な場において個別での指導や補充的な指導が必要になると考える。

宮崎県においては、特別支援学級や通級指導教室で学習している児童生徒の数は年々増加傾向にあるが、本研究ではまず、通常の学級における授業を工夫改善し、すべての児童を包み込んだ指導を行うことを大切にしたいと考えた。(資料)

特別支援教育の視点を生かしながら、通常の学級での一斉指導を見直す際に大切な考え方が「授業のユニバーサルデザイン(以下:UD)」である。これは、特別な支援が必要な子どもには『ないと困る支援』であり、どの子どもにも『あると便利な支援』を少しでも増やすという意味である。国語が苦手な児童にとって必要な支援を個だけでなく全体に行うことで、学級全員にとって分かりやすい授業になり、また国語が得意な児童と苦手な児童がかかわり合うことで学び直しや理解の促進にもつながる。また、同じ学習内容を同じ教室で友達とともに学び、分かたりできたりする経験を通して自己肯定感は高まる。このように、すべての児童にとってメリットがあるものが授業のUDであると考えた。(資料)また、UDを意識した分かりやすい授業づくりをすることは、教師の教科指導力の向上にもつながると考えた。


教科指導上で大切なこと

できないことや苦手なことを解消させることを重視する、等

教師力
 人柄が明るい、
 (笑顔、目線、表情、声、態度などに好感がもてる。)
 話し方や話す内容が明瞭。
 (話が聞き取りやすい、説明が具体的で分かりやすい。)
 自己研鑽に努めている。
 (授業等がうまくいなくても、児童のせいにはしない。)

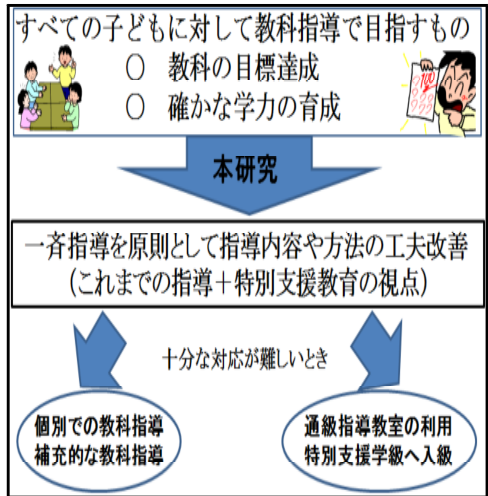
授業力
 授業の流れが明確。
 (学習の見通しがもてる、スモールステップでの指導。)
 授業のテンポが心地よい。
 (指示や発問が端的、時間を意識した指導。)
 指導と評価の一体化ができていて、
 (PDCAサイクルによる教科指導、理解の確認と対応、よくほめる。)
 (叱責よりも称賛の方が多い、できたことを認める。)

学級経営力
 学級経営も上手。
 (人間関係が良好で、児童同士のかかわりが密である。)
 児童理解に長けている。
 (一人一人をよく観察している、得意なことを伸ばす。)

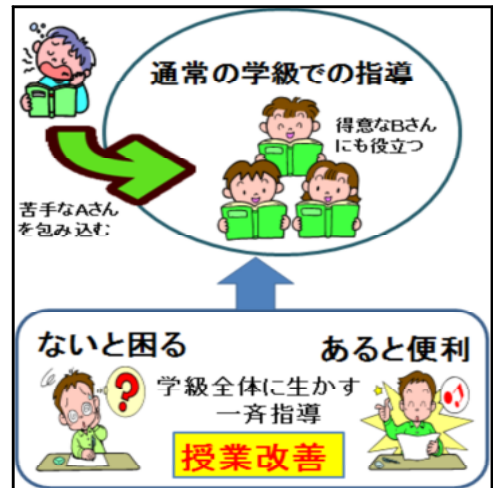


児童の実態から個別の目標を立て、個別指導を重視する、等
特別支援教育で大切なこと

【資料】：共通する特徴(イメージ)】



【資料】：教科指導に対する考え方】



【資料】：UDのイメージ図】

(3) 研究内容のとらえ方

ア 個に応じる支援について（研究内容 1）

視覚情報は、聴覚情報と比較して記録（映像）として残り、具体的であることによさがある。視覚情報は、聞くことが苦手な児童には『ないと困る』ものであり、それ以外の児童にも『あると便利』で役立つものである。そこで、個に応じる支援の1つ目の手立てとして「視覚化の工夫」を試みた。授業改善においては、具体的に理解させたり見通しをもたせたりして聴覚情報だけでは不足することを補い、学力の優劣に関係なくすべての児童の分かりやすさにつながる支援を考えた。2つ目の手立ては「指示、説明、発問の工夫」という視点である。教師の言葉を簡潔にすることも分かりやすさにつながる支援であると考えた。3つ目の手立ては「ワークシートの工夫」という視点である。児童の能力差に応じることで学習意欲や国語の力を高めたり、書くことへの困難さを軽減したりすることになり、授業の分かりやすさにつながると考えた。

イ 全員参加型の言語活動について（研究内容 2）

新学習指導要領では言語活動の充実が特に重視されているが、国語科の授業は言語活動そのものである。国語が得意な児童も不得意な児童も一緒になって言語活動を行い、全員が主体的に取り組む国語科の授業が展開されたとき、全員の国語の力は向上し、自己肯定感も高まると考えた。そこで、すべての児童にとってやさしいユニバーサルデザインの授業づくりをするために、「分かりやすい言語活動の工夫」という視点で授業を改善することとした。また、全員の学習意欲を高めるために、指導のポイントと教室環境整備の在り方について「分かりやすい授業のモデル構築」を行い、それを授業で実践・検証することとした。

ウ お互いを尊重し合う仕掛けについて（研究内容 3）

分かりやすさと学習意欲を大切にする授業を行うには、児童と教師、児童同士の良好な人間関係が醸成された学級であることが不可欠である。そのためには、教師自らが授業において称賛することを重視し、児童のよさを伸ばすようにする工夫が必要である。また、学び合いの時間に児童同士の関わりが深まるように称賛を心がけた学習指導を展開することもお互いを尊重し合うためには重要である。本研究では、称賛によって学習意欲が増し、国語の力と自己肯定感が相乗効果で高まると考えた。そこで、「自己肯定感が低下する要因の分析」を通して教師の「称賛のためのスキル」を明確にしたり、「学習意欲を高める評価の工夫」の視点からは、児童の自己評価と教師の評価をもとにPDCAサイクルの授業改善を行ったりすることとした。

(4) 児童に身に付けさせたい力

本研究における検証授業の対象は小学3年生である。そこで、3領域の調和的な指導を通して、3年生に身に付けさせたい国語の力を次のように整理した。なお、以下の力は2回の検証授業（説明文教材、物語文教材）において指導し、児童に身に付けさせたい力である。

互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりできる力
中心となる語や文をとらえ、要点をまとめることができる力
登場人物の気持ちの変化を、叙述を基に想像して読むことができる力
事実と意見との関係に注目したり、接続語や文末表現に注意して、読んだり書いたりすることができる力
内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読できる力
理由や事例などを挙げながら筋道を立て、適切な言葉遣いで話すことができる力
互いの考えの共通点や相違点を考え、話し合うことができる力

(5) 分かりやすい授業のモデル構築

国語科の3領域「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関することを中心にして指導のポイントをまとめ、右のような一覧表を作成した。【資料】この一覧表を基に、指導上配慮することを例えば検証授業の実際に示すように具体的に考え、実践に生かすこととした。

また、分かりやすい授業を行うためには、視覚化されたものを黒板周辺に工夫して配置するような教室環境の整備も大切だと考え、次のような配置を原則として授業を行うこととした。【資料】


「話すこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ どう伝えればよいかをパターン化して具体的に示す。(話型表や話し合いマニュアルの活用) ・ 子どもが話した内容についてよかった点などを伝える。(称賛のスキル) ・ 書いたものを見ながら話をさせる。(話し言葉の視覚化) ・ 教師と一緒に読むことで緊張をほぐし、自信をつけさせる。(読み方のモデリング)
「聞くこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 静かな状態してから話す。(静かで聞きやすい環境作り) ・ ポイントをしぼって端的に、明確に話す。(分かりやすい言葉・内容) ・ 視覚的な提示を行いながら話す。(分かりにくい言葉の視覚化) ・ 1回に1つの指示をする。(一時一動作) ・ 話し終わった後にちゃんと聞き取れたかを確認する。(復唱による確認)
「書くこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 板書と同じ内容のものを書かせる。(書くことの分かりやすさ) ・ 板書する文字の量を少なくし、文字色や字体の大きさを工夫し、見やすく書きやすい板書にする。(書く質) ・ 全部書くもの、途中まで書くもの、ワードだけ書くものなど段階をもたせる。(書く量)
「読むこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読めない文字にはふりがなをつける。(ヒントの視覚化) ・ 文節読みや交互読みなどの方法を取り入れる。(変化のある繰り返し) ・ 読むところだけ見えるようにする。(厚紙、定規、蛍光ペン、サイドライン等) ・ 課題の説明に絵や図を取り入れ、文字以外の情報の助けを借りて学習させる。(視覚化) ・ 単語をフラッシュカードにして絵カードを選び取るゲームを通して、意味理解を促す。(活動の見通し) ・ 単語をフラッシュカードにして絵カードを選び取るゲームを通して、意味理解を促す。(分かりにくい言葉の視覚化)
「その他」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要なものを机に出し、使わないものは片付けるルールを決める。(物的環境) ・ タイマーを活用して、時間の進み具合を視覚的に理解させる。(時間の見通し) ・ 学習活動の見通しを具体的、視覚的に示す。(活動の見通し) ・ できるだけ称賛の言葉かけをし、分かりやすく興味をひく授業を心がける。(全体への称賛のスキル) ・ 適切な行動ができたときに、すぐに称賛することで正しい行動を強化する。(個への称賛のスキル) ・ 肯定的な言い方や自己決定できる余地を残した言葉かけをする。(相手の尊重) ・ 机上での静的な課題と、動きの変化をもたせた動的な課題を授業中に計画的に展開する。(学習意欲や集中力の持続) ・ その子に応じたできる課題を選ばせたり、言葉かけや身体動作等による称賛をしたりして、自信をもたせたり、認められているという実感をもたせたりする。(称賛のスキル) ・ 授業態度の目標を段階的に提示して意識化させる。(スモールステップ)

【資料】：分かりやすい授業にするための指導のポイント

(6) 児童の実態把握

特別支援教育においては、児童理解を通して個の学び方の特性をとらえていくことを大切にしている。特別な支援が必要な児童については個別の指導計画を見直しながら

これまでの配慮事項や巡回相談等で得られたアドバイスなどを整理し、それを個別指導だけでなく一斉指導に生かすことにした。【資料】また、国語科や自己肯定感に関する客観的なデータを得るために、過去4年間のみやざき小中学校学力・意識調査を活用した。「児童は担任1人による一斉指導の授業形態を肯定的にとらえている」「国語が苦手な児童にとっては、国語の授業はあまり好きになれず、分かりにくいという傾向が見られる」「自己肯定感に関しては学年が上がるほど全体的に評価が低い」ということが明らかになっている。また、「9才の壁」という言葉があるように、検証授業対象の小学校3年生は学習が具体的な内容から抽象的な内容になるため、学習面に困難さを抱える児童が増加しはじめる学年でもある。このことから、本研究において一斉指導の授業改善を通して、国語が得意な児童だけでなく、苦手な児童にとっても楽しくて分かりやすい授業を行い、国語の力を高めながら、授業の中でもっと自己肯定感も高めるような取組をすることがとても大切だと考えた。

	黒板の左側	黒板の右側	ヒントやルール
	学習の見通し (短冊) タイムタイマーと学習の見通しを近くに配置する。 常に見るものだけを前面に配置する。	板書スペース (文字と絵)	プロジェクターの映像 (教材文の拡大提示)

【資料】：黒板周辺の環境整備

A児に対して	視覚優位なので話し言葉だけではなく、目で見て分かるような手立てを使って支援する。 複雑でいるような要素が含まれたものよりも、必要なものに絞った視覚支援をする。 1つ1つものごとの順番通りに考えていくことが得意なので、手順を書いて示したり、全体を部分に分けたり、パターン化された課題を出したりして支援する。 当然分かっているだろうと思われることについても、分かりやすく丁寧に説明をする。
B児に対して	課題が早く終わったときなどに別のことをしてしまうので、全体的見通しを持たせたり、課題が終わった後にすることを具体的に指示したりする。

【資料】 支援が必要な児童に対する配慮事項

2 検証授業 の実際

(1) 授業のポイント〔第3学年 教材名「ほけんだよりを読みくらべよう」6月23日実施〕

<p>【本時の目標】</p> <p>一つ目の文章を読み、書き手が伝えたいことや、書かれている事柄や説明の仕方を読み取ることができる。</p>
<p>【本時の授業仮説】</p> <p>絵カードやICT活用などの視覚的な配慮をしたり、ワークシートを選択させたり、教師が簡潔な発言や称賛を心がけたりすれば、すべての児童に書き手が伝えたいことや、むし歯の原因と予防法を読み取らせることができ、分かりやすい国語の授業を行うことができるであろう。</p>

(2) 指導上配慮する指導・支援について

指導案を作成するに当たって、児童の実態把握を基にした指導・支援のポイントを整理した。学習上の様々な困難さが少しでも軽減されることを目指して、単元全8時間においては、3領域ごとに、いつ、どのような配慮をするのか(資料)、本時の指導においては、導入・展開・終末の段階で何に配慮するのか(資料)などを指導観に明記した。これらを教師が事前に把握しておくことで、すべての児童が学習活動に主体的に参加し、教材文を正しく読み取り、自分の考えを表現することができると思った。

また、他の先生方に授業を見ていただく際、特別支援教育の視点を共通理解するために、指導・支援で配慮することを吹き出して困りで表記するようにした。【資料 】

このような工夫を指導案作成に取り入れることで、教科指導に特別支援教育の視点を融合して授業を行うという本研究のねらいを授業研究レベルで示すことができると考えた。

(3) 個に応じる支援について(研究内容1)

注目させたい教科書の文章をいつでも見ることができ、全員が同じ視点で思考したり作業したりしやすいように、実物投影機を使って常に黒板の右半分に教材文を拡大提示できるようにした。大事な言葉に印をつけたり、サイドラインを引いたり、文章に書いてあることを一斉に確認したりするときなどに活用した。板書については、黒板の左側を使った。分かりやすく学習できるように、書く場所や1行の文字数などはワークシートと対応するような板書計画を立てた。できるだけ書く文字数を減らしつつ、絵カードも生かした板書【資料 】にしたことで、児童はほとんど戸惑うことなく学習に取り組むことができた。

全8時間を通して、配慮する指導・支援のポイント	
<p>読むこと(音読)</p> <ul style="list-style-type: none"> 読み慣れない漢字にふりがなをつける。(1~3時間目) 教師と一緒に読む。(必要に応じて) サイドラインを引いたり、厚紙で不要な文章をかくしたりして、読むべき文章だけに注目させる。(1~5時間目) 交互読み等で変化のある音読をする。(1~4時間目) 	<p>読むこと(読解)</p> <ul style="list-style-type: none"> 挿絵等を使って、復元化により言葉の意味理解を助ける。(2~4時間目) 説明や疑問を簡潔にする。(毎時間) 教科書の記述に基づいて思考、表現できるように、大事な言葉に印をつける。(2~6時間目)
<p>書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 自由記述式やキーワードの穴埋め方式などのワークシートを選択させ、個の書く能力に対応する。(2~5時間目) ワークシートに書くことと板書の内容を同じにする。(2~5時間目) 書く時間を十分にとり、書き終わるまで待つ。(6~7時間目) 	<p>話すこと・聞くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークシートに書いたものを読む。話し方のパターン化を図る。(8時間目) 指示や説明は簡潔にする。1回につき1つの意味だけ伝える。(毎時間) 複眼的な情報提示をうけるが話を聞く。(毎時間) 教師や友だちが話したことを意図的に復唱させる。(必要に応じて)

【資料 指導・支援のポイント整理】

本時において配慮する指導・支援のポイント(2/8時間目)	
導入	
<ul style="list-style-type: none"> 前時に習った新出漢字「歯」を復習する。→ 漢字が苦手な児童への意図的指名により、読みの確認をすることができる喜びを味わわせ、学習意欲を高める。 本時の見通しを提示する。→ タイムタイマーを使って時間的な見通しをもたせたり、学習活動を明示した見通しの表を、活動が終わり次第消していき、集中力を継続させる。 	
展開	
<ul style="list-style-type: none"> 音読のさせ方に変化をつける。→ 短いまとまりごとに区切って、教師や友だちと交互読みをしたり、意図的指名で読ませたりして読みの困難さを軽減し、読む意欲を高める。 実物投影機を活用する。→ 教科書p70~71を拡大提示し、今どこ注目しなければならないのかを視覚的に分かりやすくする。また、児童が発表したことを書き込み、話し言葉を視覚化して残すようにする。 	

【資料 各段階での配慮の一部】

学習指導過程				
段階	学習内容・活動および「教師の主な指示・説明・発問」	指導上の留意点(吹き出し：特別支援教育の視点)	評価規準(評価方法)	準備
1	新出漢字「実」を練習する。「読み方の練習をします。」	空書き→指書き→なぞり書きの順で一斉に指導する。		実物投影機 A4の紙 スクリップ (固定)漢字の
導入	<ul style="list-style-type: none"> 児童用のがらと同じものを拡大提示して、どこを練習するのか明確にする。 すでに習った「歯」などの漢字の復習を行い、正しく読める児童を称賛し、学習意欲を高めた状態にして本時の学習に臨ませる。 			

【資料 配慮事項を吹き出して表記】

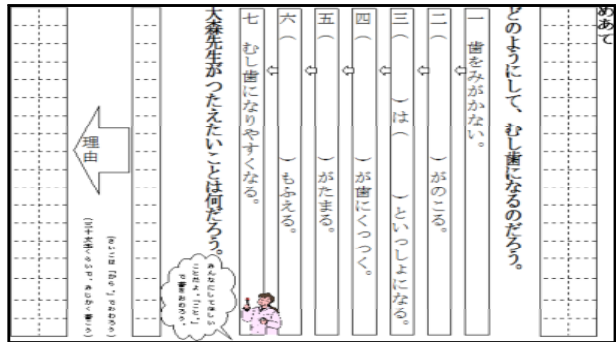


【資料 黒板左側の実際】

また、主な指示・説明・発問を事前に精選して指導案に明記することで、簡潔な発言ができるように心がけた。【資料】「形式段落の～に出てくる言葉の中で3回以上出てくる言葉を探しましょう。」「見つけたら言葉で言葉を囲みましょう」という一時一動作で具体的な指示を出すと、多くの児童は一斉に作業に取りかかり、教材文を何度も確認しながら丁寧に読み取る姿が見られた。さらに、児童が毎時間自分で好きな方のワークシートを選んで学習できるように、2種類のワークシートを作成した。【資料】穴埋め式にしたり、ヒントを載せたり、マスを付けたら、文字数を制限したり、キーワードを用いて文章を書かせたりする等、児童の能力差に応じることができる工夫をしたことで、児童は意欲的に学習に取り組むことができていた。

展開 30分	6	ならべかえタイムをする。
	7	「7枚の絵を順番に並べかえましょう。」
	7	一人しらべと話し合いをする。
	7	「どのようにして、むし歯になるのでしょうか。」(主発問)
	8	「大事な言葉にサイドラインを引きます。」
	8	つたえたいことさがしをする。
	8	「大森先生が一番伝えたいことは何でしょうか。」(主発問)
	8	「ワークシートに短く書きまとめましょう。」

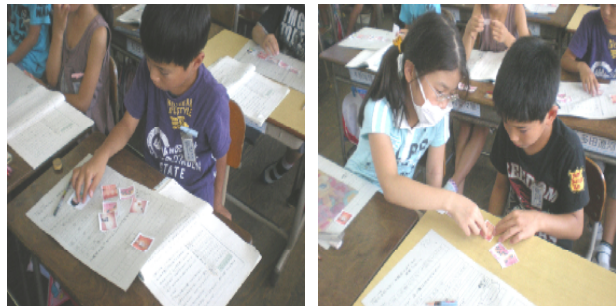
【資料】 指導案の指導過程の一部



【資料】 ワークシートの一例

(4) 全員参加型の言語活動について(研究内容2)

本教材文には、読み取りの際にキーワードとなる「歯こう」等の名称や「しみる」等の抽象的な言葉が複数ある。これらの言葉の意味を正しく理解できないと、読み取りにおいて分かりづらさが生じると考え、絵カードを使って言葉の意味をイメージ化させた。そして、絵カードを並べ換える操作活動をさせたり、絵カードを基に友達同士で学び合ったりすることで【資料



【資料】 絵カードの活用場面

】、教材文を正しく読み取らせることができると考えた。個人用の絵カードがあることで全

員が参加でき、並べ換えるという動作化が加わることにより、教材文を読むだけよりも分かりやすくなると考えた。その後、絵カードの順番を確認する際は、学級全体で力を合わせて正答を導くことで互いの存在を認め合ったり、学び合いを盛り上げるために、あえて教師が順番を間違えて絵カードを貼り「なぜ、この順番ではいけないの?」と発問することで、教材文に注目させて理由を考えさせたりした。このようにスモールステップで読み取りを行うことで、多くの児童が発表でき、最終的には教材文だけでワークシートに書きまとめることができた。

(5) お互いを尊重し合う仕掛けについて(研究内容3)

授業では、児童に称賛の声かけを多くし、児童のよさを見つけたらすぐに言葉にして伝えることが大切だと考えた。「手が真っ直ぐ拳がっているね。」「上手に音読できるね。」「聞く姿勢が素晴らしい。」等と児童の行動や状態像を具体的に称賛することで、多くの児童がそれをモデルにして模倣しようとする姿が見られた。

3 検証授業 の実際

(1) 授業のポイント〔第3学年 教材名「サーカスのライオン」10月21日実施〕

<p>【本時の目標】</p> <p>自分の考えを伝え合う活動を通して、金色に光るライオンになったじんざの気持ちをグループでまとめたり、自分の考えをもったりすることができる。</p>
<p>【本時の授業仮説】</p> <p>ICT活用や板書による視覚化の工夫や、グループ編制の配慮、児童への称賛を積極的に行えば、全員が参加できる言語活動や分かりやすい授業を行うことができるであろう。</p>

(2) 個に応じる支援について

パワーポイントで提示する資料を作成することで、聴覚に加えて視覚からの情報も児童に与えることを心がけた。【資料】一時一動作の短い言葉かけでスライドをテンポよく替えていくことで、多くの児童は集中して画面を見つめ、「今何をすべきか」を把握して学習に取り組んでいた。また、教科書の挿絵を拡大提示したり、映し出した挿絵の余白に、児童から出た意見を書き込んだりして、主人公の気持ちを全員が理解できるよう配慮した。【資料】

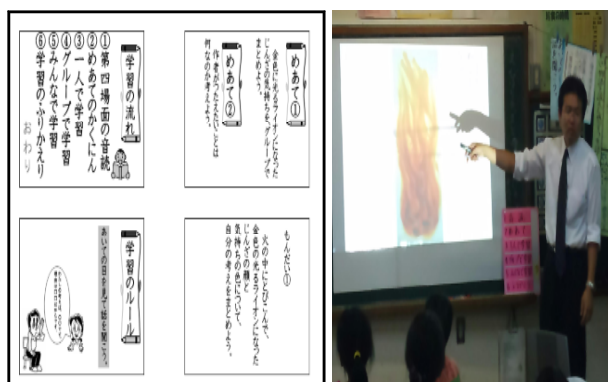
さらに、言葉以外の表現方法の活用を試み、登場人物の表情を絵で表したり、登場人物の気持ちを色で表したりできるワークシートを作成した。これによって最終的にすべての児童が登場人物の気持ちを言葉で表現することができると考えた。【資料】

(3) 全員参加型の言語活動について

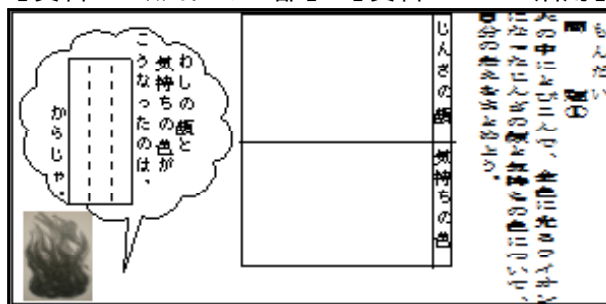
「国語が得意なAさん、苦手なBさん、その中間のCさん」という能力差のある3人グループを意図的に編制し、学び合いの時間を確保した。能力差があるグループで話し合うことで、教え合う姿が見られたり、自分とは違う意見を聞いたりすることができると考えた。学び合いの時間では、話し合いマニュアルを使って自分の考えを発表させた。【資料】その発表は、Aさん Cさん Bさんの順番で行わせた。国語が得意なAさんの発表の様子を最初に見ることで、Aさんをモデリングして、CさんやBさんが自分自身の発表に生かすことができると考えたからである。その結果、話し合い活動を通して3人の考えをまとめる時は「なんでこんな顔になったの?」「この色にした理由は何にする?」などと和やかな雰囲気の中で、互いに考えを伝え合いながら、友達とかかわる姿が多く見られ、すべてのグループが自分たちの考えを書き表すことができた。【資料】

(4) お互いを尊重し合う仕掛けについて

学習意欲を高めるために、授業の導入で意図的に児童をほめる仕掛けを取り入れた。ICTを活用したフラッシュ教材による漢字の読みの復習と音読である。次々に漢字を読んだり、音読のよいモデルを映像で見たりすることで、導入段階で学習意欲が高まり、その後の読み取りや話し合いも意欲的に行うことができた。【資料】



【資料】 スライドの一部 【資料】 ICT活用



【資料】 ワークシートの一例



【資料】 話し合いマニュアルを活用する場面



【資料】 3人で役割分担をして書いた考えの例



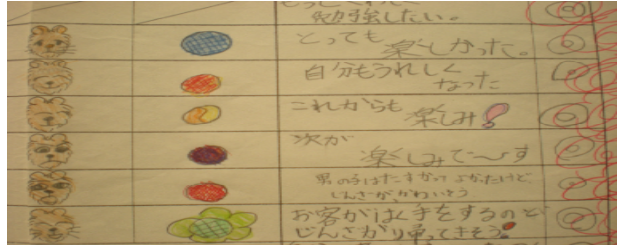
【資料】 ICT活用による称賛の例

また、意図的にグループ編制した3人組での学習では、分からなくて困ったときに友達同士で教え合うことができた。【資料】お互いを尊重し合う観点からも友達同士の学び合いは大切なことだと考える。

称賛においては、児童の言動を肯定的に捉えた言葉かけ以外にも、振り返りプリントに毎回目を通し、花丸やコメントなどで視覚的な称賛を行うことを学級担任に依頼した。【資料②】視覚的な称賛をすることで、児童はそれを見ても見ることができ、学習の様子を先生がしっかり見届けてくれていることを実感することができていた。



【資料】 教え合う場面



【資料②】 視覚的な称賛

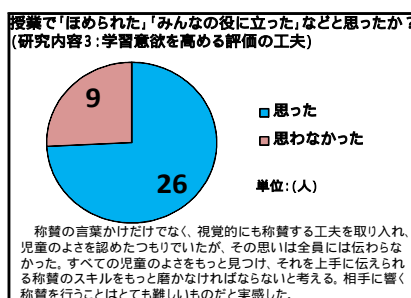
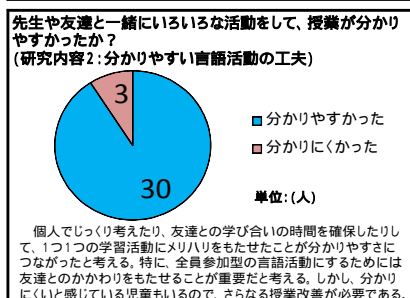
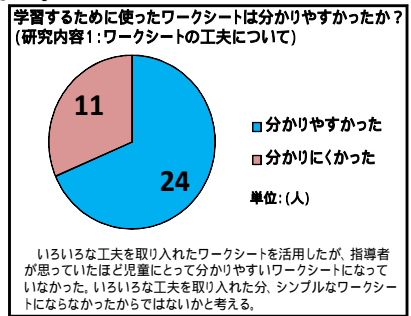
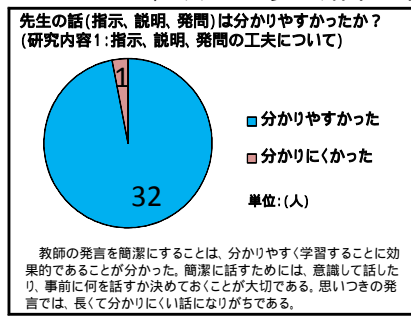
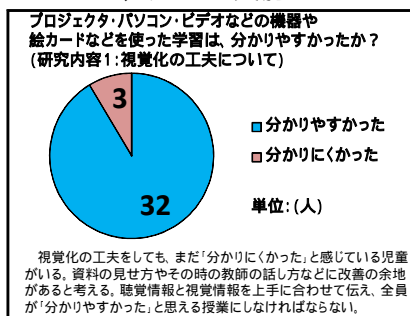
4 検証授業の考察

2回の検証授業を終えて、学級担任や授業を参観していただいた先生方にアンケートを行った。

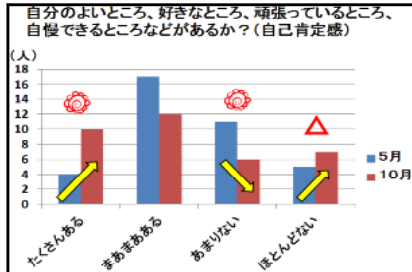
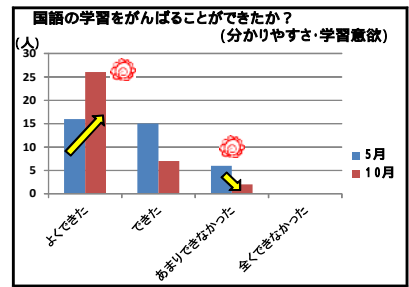
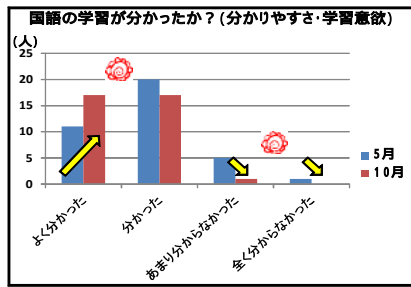
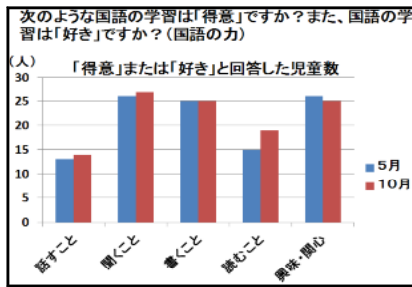
よかった点	改善すべき点
<p>視覚化や簡潔な発言を意識して授業すると、それが多くの児童にとってよさとして受け入れられ、分かりやすい授業を保障することができる。</p> <p>一時一動作で指示ができていたときは、児童の活動の様子もよかった。</p> <p>実物投影機で教科書の文章を拡大提示することは、大事な言葉や文をみんなと一緒に共有化したり、確かめたりするには有効である。ICT活用で児童の学習意欲が高まる。</p> <p>多くの児童は、いつも以上に集中して授業に取り組んでいた。ワークシートの工夫があったので、それに自分の考えをたくさん書き込んでいた。</p> <p>絵カードは視覚的に分かりやすく、児童の興味をひくことができる。絵カードを並べ換えてから、教科書の文章をスモールステップ読み取るという流れは、多くの児童にとって分かりやすく、意欲も高まっていた。話を聞くだけでなく、動作化を意図的に組み込み、学習活動に適度な変化をつけることが大事である。</p> <p>読み取りに言葉以外のもの（表情や気持ちの色）も用いる方法は面白くて分かりやすい。ほめることが多い授業は、児童もうれしそうで、一生涯学習に取り組んでいた。</p>	<p>実物投影機を児童にも使わせてサイドラインを引かせるともっと効果的であった。</p> <p>主人公の表情や気持ちの色を書く活動は、児童によっては難しく時間がかかる。また、色を自由に書かせると思考が広がりすぎて、考えを集約しにくいのではないが、色だけで表現すると、色覚異常の児童がいる場合には配慮に欠けることにつながる。</p> <p>ヒントに文字数があるとそれにこだわったり、マスを数えたりして混乱してしまう。</p> <p>2回目の検証授業では、たくさんの紙がグループに配られたので、どこに何を書けばいいのかわからず混乱していた児童が目立った。言葉の説明だけでなく、視覚的に見本を示してから活動に入るべきだった。</p> <p>話し合いマニュアルを使わせたが、単に書いてあることを伝えているだけで、話し合いまでは十分に深めることにつながっていなかった。はじめから自分の考えをもっていなくても、話し合いの中で考えがもてるような学習活動を取り入れる方がよいのではないが。</p> <p>発言していない児童をほめる手立てが不十分だった。全体をほめているつもりでも、それが十分に児童に届いていない。</p>

指導者自身はよいと思って取り入れた指導・支援の工夫について、他の先生方から指摘していただくことで手立ての成果や課題を客観的に見直すことができた。

また、児童に実施したアンケートからは、次のような結果を得た。

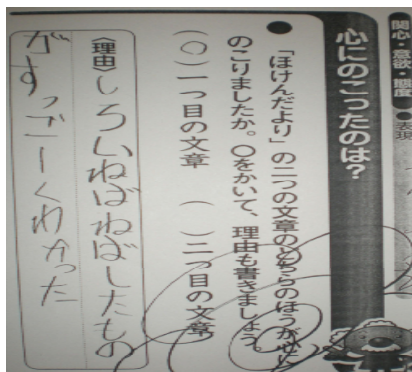


なお、にはその分析を記す。



学級担任による普段の授業に加えて、2回の検証授業で行った手立てが多くの子どもの学習意欲を高めることや授業の分かりやすさにより効果を与えることが分かった。国語の力については、「得意」または「好き」と回答した児童数にわずかな増加が見られ、授業に対して「頑張った！」「分かった！」と感じるようになってはいるが、国語の力の向上を実感させるまでには至らなかったととらえる。また、自己肯定感に対する変容を見ると、「あまりない」が減り、「たくさんある」が増えたことから全体的に自己肯定感が高まった児童が増えたのととらえる。

最後に具体的な児童の姿を1例述べる。左の資料②は、検証授業の単元の市販テストである。この児童は国語が不得意であり、読み取りに苦労していた。しかし、このテストでは、自分にとって効果があった文章を選び、理由も検証授業で意味理解させたかった「ねばねばしたもの」という言葉を使って書くことができていた。このように、検証授業においてとった手立ては、その児童なりに教材文の読み取りができることにつながったと考える。



【資料②】 テストの一部

成果と課題

授業改善のための手立て（個に応じる支援、全員参加型の言語活動、お互いを尊重し合う仕掛け）を指導に取り入れた授業を行うことは、多くの児童にとって分かりやすく楽しい学習につながり、学習意欲を高めることができ、自己肯定感の向上にもつながった。

教科指導と特別支援教育を別々に考えるのではなく、この2つを両輪として教材研究を行い授業を実践することが、教師にとっては指導力の向上につながると実感することができた。

今後、国語の力が身に付いたかを客観的に評価する研究が必要であり、国語の力の向上のために本研究で取り組んだ手立てを継続して実践することが重要だと考える。

本研究では、国語科に特化して特別支援教育の視点を生かした授業づくりを行ったが、本研究の基本的な考え方は他教科の授業づくりにも大切なものであると考える。すべての児童の笑顔と未来のために「やさしい教育」を地道に行うことは、教師の職務の原点であり、これからの共生社会を構築する人材づくりにもつながる非常に意義深い教育実践であると考えられる。

《参考文献》

・ 小学校学習指導要領	文部科学省	東洋館出版社
・ 小学校学習指導要領解説 国語編	文部科学省	東洋館出版社
・ 特別支援教育ガイドブック	宮崎県教育委員会	特別支援教育室
・ みやざき小中学校学力・意識調査	宮崎県教育研修センター	
・ 通常の学級の授業ユニバーサルデザイン	全日本特別支援教育研究連盟 編	日本文化科学社
・ 授業のユニバーサルデザイン	桂聖 廣瀬由美子 編著	東洋館出版社
・ 国語授業のユニバーサルデザイン	桂聖 著	東洋館出版社